



# あすもりサポーター通信



## 1月31日に、「第5回北海道の森づくり交流会」を開催しました。今年のテーマは「森の仲間を増やそう」です。



あすもり基金では毎年1月に、森の循環に携わる人たちと組合員のみなさんのネットワークづくりのために、全道各地区をTV会議で結んで、森の活用や木を使うことを考える場として「北海道の森づくり交流会」を開催しています。今年は全道11会場に229名の組合員さん、森づくりに携わる団体や個人のみなさんが参加しました。第一部は札幌会場と各地区を結んでTV中継を行い、第二部は各地区ごとに今後の連携企画などについて話し合いました。



### 特別講演

### 「森の仲間を増やそう～だれでも参加できる森づくり」

NPO法人地域再生機構・木の駅アドバイザー 丹羽健司さん



今年は「森の健康診断」や「木の駅プロジェクト」を推進する丹羽健司さんに講演していただきました。丹羽さんは2002年に愛知県豊田市の市街地を襲った東海豪雨災害の際に聞いた「山を手入れせんからだ」というお年寄りの声をきっかけに、山の健康状態に目を向けました。そして、山村を再生するために、まずは森を知り、森を守り、その恵みを享受しあう村をつくり、次世代につなげる仕組みづくりとして森と地域を元気にする活動へと発展させてきました。

まず最初に、矢作川水系森林ボランティア協議会や研究者グループと一緒に、森を知るツールとして、荒れた不健康な山がどれだけあるかを調べる「森の健康診断」を考え出しました。気軽にできる森林調査にするため、100円ショップで買い揃えられる手軽な道具を用いました。調査は5～8名のチームで行い、五感を通して森林の中の音や匂いを取り入れる時間を大事にしています。健康診断後の処方も森林で感じ学んだことを活かす人たちにゆだねるなど、ボランティアの存在意義を高めながら森林管理を行っています。こうした取組みを通して、市民の「森林」への親しみが増し、自分たちの手で評価する体験の場へと意識が変わりました。丹羽さんの名言「人が変われば、森が変わる」…まさにその通りです。

「木の駅プロジェクト」では森林整備として間伐材を伐採し出荷をすると、地域通貨「モリ券」を取得できる仕組みになっています。このモリ券が地域に循環し出すと、商店の人たちが山の整備に関心を持って協力するようになり、新たな地域型産業ができてきました。このように地域の人たちの気持ちを形にしなが、地域で森林を守り、地域の自治へとつながったこの取組みがさらに全国へと広がる事を願います。

### 鼎談(ていだん)、2015年度助成金贈呈式

続いて、講師の丹羽健司さん、当基金運営委員長の柿澤宏昭さん、同運営委員の浜館三裕姫さんによる「鼎談」を行いました。あすもりサポーターさんや助成団体さんが取組んでいる3つの事例を発表してもらいながら、丹羽さんや柿澤委員長と一緒に、北海道の森づくりについて考えました。事例発表は、森づくり活動から環境学習へとつなげている「コープさっぽろ釧路地区」、参加者自身がデザインする森づくりと人材養成を道民の森で行う「森づくりワークショップ」、道産材普及のために木育活動を行っている助成団体「木育マイスター道南支部」の活動です。

最後に、森づくりを活発にするには何が大切かをお聞きしました。

- 柿澤運営委員長「人の輪を広げつつ、地域全体で森づくりをどうしていくのかを考えながら取組んでいくことが大切」
- 丹羽さん「何をもって森づくりとするのか。つながりをつくり、山が愛おしくなる取組みが大切」
- 浜館運営委員「子どもから大人まで誰もが木とふれあえる活動を、どんな小さなことからでも始められるきっかけをつくること」

鼎談の終了後、2015年度の助成団体のみなさんに柿澤運営委員長から助成金目録を贈呈して、本交流会の第一部を終了しました。



森づくりワークショップについて発表中



2015助成団体のみなさん(札幌会場)



## 札幌地区から

札幌で開催された「北海道の森づくり交流会 第二部」のようすをご紹介します。



### 札幌地区 (参加 108 名)

札幌地区では森づくり団体・企業の活動を知り、情報交換するプログラムを行いました。

最初は 21 の団体・企業のみなさんによる、コンテスト形式の「1 分間の団体活動アピールタイム」です。コープさっぽろの小樽・石狩 A 地区や南空知・石狩 B 地区、森づくりワークショップを運営する雪印種苗、あずもり基金事務局を担当するきたネットも活動を発表しました。

時間は 1 分間、話しきれなければそれまで。短い発表時間に話すほうも聞くほうも真剣。次々に、マイクの前に進みます。しかし、無常にもタイムアップのカスタネットが鳴り、時間ぴったり話し終えた時には、思わず会場から歓声が。どの団体もタイトな時間ながら、活動の見える個性豊かなアピールに温かい拍手が贈られました。

団体発表の後は参加団体・企業の展示説明ブースを回ったり、第一部の講師の丹羽さん、柿澤運営委員長、あずもり基金の各テーブルを訪問して自由に交流する「交流タイム」です。どのブース・テーブルにも人が集まり、興味津々に話しかけていました。気づくと、あつという間に閉会時間に。

閉会式では1分間アピールタイムの表彰式が行われ、「話しきれたで賞」は北広島森の倶楽部、「もっと聞きたかったで賞」は NPO 法人もりねっと北海道、「元気があったで賞」は NPO 法人 ezorock、「参加者が選んだで賞」は NPO 法人森林遊びサポートセンターが受賞しました。「おもしろかったで賞」には、『丹羽さんの“森健グッズ”のほとんどが百円均一で揃うとは知らずに、高い調査道具を買ってしまったっ!』と訴えて、会場をどっと沸かせた、間伐ボランティア「札幌ウッディーズ」が選ばれました。

冬の寒さも吹き飛ばす、これからにつながる熱い交流会になりました。



## 森づくりワークショップ報告 / 当別道民の森・Fの森



### 第4回ワークショップ (開催日: 2014年11月15日(土))

2014 年度最後の「森づくりワークショップ」は、札幌市内のコープさっぽろ北 12 条店でを行いました。19 名が参加して、2015 年度の植樹エリアと樹種について話し合いました。最初に、北海道林業試験場(美唄市)の棚橋生子さんに、2014 年 5 月と 7 月の WS で行った、樹種別の生育調査とウサギやネズミなどの食害調査の分析結果を報告していただきました。「雪折れが多かったのはニレ、ウサギが好んで食べたのはイタヤカエデ」など、とても興味深い内容でした。こうした分析は「どんな木をどこに植えるか」を考える時の参考になります。

続いて、2015 年度に植栽する区域と樹種について、2 グループに分かれて話し合いました。各グループからは「実のなるエリア」「お花見エリア」「頼もしい木のエリア」「天ぷらエリア」「低木エリア」など区画ごとのテーマ案がそれぞれ発表され、ひとつの案にまとめるのに苦労しましたが、終始笑いにあふれるワークショップとなりました。森が育つおもしろさを実感したメンバーは感想などを話し

合いながら、これからどういった森づくりをしていくか、活動方法について意見を出し合いました。「こんなに自分が楽しんでいいんだろうか!」「WS 案内のハガキが届くたびにワクワクする」「木を育てることの大切さを次の世代、子どもたちに伝えていきたい」「子どもがどう関わっていけるかを考えよう」「もっと体を動かしたい」「すごいことに足を踏み入れてしまったと実感」「あの森にツリーハウスも作ろう」など、育樹や親子での参加しやすさを求める意欲的な意見が多く述べられました。現在、2015 年度のメンバーを募集中です(4 月 15 日締切)。ぜひご参加ください。

基金運営委員 前濱喜代美

